

●今日なぜ、佐々木健一「芸術の基底-制作学から解釈学への回帰」(1982)を扱うか？

- 渡辺論文「音楽の意図と意味」は、なぜ芸術作品が意味を伝えるかを論じ、その基底には「作者の意図」があるとする一方、佐々木は、その基底に「作品の本質」(p.14)、「芸術作品の本質」(p.22)、「表現の論理」(p.15)等があるからだという。
- では佐々木にとってその「作品の本質」等とはなにか？、なぜそれが意味を伝える基底となるか？を知りたくなる。
- それを知るために「基底」論文を大まかにプレビューしておくことにした。

●(佐々木は何を言いたかったか？)

- ・「基底」論文(1982)での佐々木の主張は、人間活動において、会話と芸術は違う性格を持つということ。この違いによって両者に対する解釈の仕組みに違いが生ずるとのこと。ただしこの論文では、芸術作品全体の解釈ではなく、作品内の部分的解釈に影響を及ぼすことに限り明らかにしようとしている(p.14, 原注3 参照)

●(具体的には？)

- 「作品」概念なるものが、人間にとって先天的に存在する。
- 「作品」(を作る)という概念と対照的なのは、会話するという概念。
- なぜこのような前提が可能かというアリストテレスに拠るため。
- アリストテレスは人間活動を「制作」と「実践」にわけた(p.13)。
- ただし佐々木の興味深いところは、両者に対する「人間の受容する態度が異なる」としており、つまり人間が問題となっていることだ。作品だけを問題としているのではない。このような人間への着目から、ここではプラグマティクス(言語行為論、語用論、プラグマティクス、といった、人間による受容の問題として議論されることになる)。
- 人間存在を超えたところにある「作品」存在を議論しているわけではない(p.17, 芸術を超越的にとらえる「ロマン主義的な常識」に対する「解毒作用」)。=人間が消滅したら作品も消滅する。

●(区別があるとして、何が問題か？)

- 区別のために、人間は「会話」と「芸術」とでは、それを受容する態度が異なること。
- 事例 = 第1章でのビクトル・ユーゴー作『エルナニ』における、作品世界内と鑑賞者との間のエルナニの生死に関わる解釈の違い(pp.14-16)。

●(どのような態度の違いが生ずるか？)

- 「協力の原理」といっても、会話と芸術とでは協力するという性格が違う(会話は意図する内容を伝えようとする気持ちという道徳的態度。芸術作品は有機的構成を完璧に作り上げるといった結果に対する責任への態度)。
- 会話は「発話者の意図」を最大限に汲むことで、言語的不完全性を、受話者が補うことでコミュが成立し意味が解釈されていく。テキストの不完全性が許される。一方、芸術作品は作品内での完成度の高い「有機的構成」(要するに作品内の要素全てに作品としての意味があり無駄がない)が実現していることを前提条件としてコミュが成立し意味が解釈されていく。テキストの不完全性が許されない。
- 作品において完成度が高いと、作者の存在が薄れる。そのことで作品は自然物に近づいていく。完成度が低いと未熟な作者の存在感が意識されてしまう(p.21)。
- 会話は発話者と受話者とが直接に関係するが、作品は作家と鑑賞者の間に作品が介在することで、両者は間接的に関係するというコミュニケーションの違いがある(p.19, 21)。

- 渡辺は会話と藝術作品のコミュの仕組みは言語構造として同じであるとし、意味伝達は両者が同じ語用論的構造をもつとする一方、佐々木は会話と藝術作品のコミュの仕組みを異なるものとする。会話はたしかに人間同士の直接的な語用論的構造 (= 会話のプラグマティズム) をもつが、藝術作品では、作品のもつ有機的構成 (= 無駄なく完成度が高いもの、理想としては自然物のような有機的性格をおび作者が意識されない) を介在した特殊な人間同士の語用論的構造、つまり「芸術のプラグマティズム」というべき仕組み。

・上記の佐々木論の興味深いこととしては、「作品」や「芸術作品」という存在(概念)が、〈人間にとって〉先天的に存在しているという前提があること。その存在はアリストテレスを論拠として絶対視していること。

● (精読のための資料)

- 「関与性」= 藝術作品の各要素が無駄なく意味をもっていること。意味的に有機的であること。
- 「アリストテレスのエコノミーの法則」= 藝術作品において各要素が無駄なく意味をもっていること (p.15 下左)。
この論はアリストテレス『詩学』による。
- ア・プリオリ = 先天的。 ⇔ ア・ポステリオリ = 後天的。

● 感想・疑問

- 佐々木論では、それではなぜある作品を聞くと多くの人が同様に具体的に悲しいと感じるかという直感的な経験を説得的に説明できない。それを本当に、作者の存在ぬきで「作品内の有機的構成」具合だけで説明できるものなのか? という疑問がやはり残る。
一方、渡辺の議論の源には、上のような「直感的経験」を前提とし、その仕組みを問うているように思う。
- 佐々木論によると、藝術作品の完成度が高まると自然物に接近して作者の存在が薄まるというが、本当に作者像が薄まるのか? 佐々木論が正しいとすると、なぜ歴史は大藝術家を讃えるかが疑問となる。
- 佐々木論のように自然物と藝術作品が近くという論は「美」や「芸術」の本質、価値、意義、などを考えるうえで、心証的には、魅力を感じられる。しかし学問的にはいささか神秘的にすぎないか。渡辺はおそらく、「でも作ったのは人間であり、学問としてはそれを超えて議論することはできない」と考えているのではないか。